

阪牧吉次の「遺言」

11月25日のレポート、悲しい「喪中」の知らせに書いたように、大学時代の同期の友人、阪牧(昔から、こう呼んできた)が亡くなったことを知り驚愕した。翌日、奥さまにお悔やみの手紙を送った。折り返し、写真の阪牧の本などが送られてきた。阪牧がどうして亡くなったかなど、この間の「事情」がよくわかった。すぐに本を読み、奥さまにお礼の手紙を送ったが、なかなかレポートを書く気にはなれなかった。年が明け、阪牧の「遺言」でもある本書を多くの人に伝えたいと思うようになった。

「まえがき」から一私は、昨年来、骨髄異形成症候群という難病を患い、長期にわたり入院しています。実は、前著「塵芥抄~私の紡いだ『言の葉』たち」を平成25年4月1日、65歳の時発刊し、次は後期高齢者になる75歳に発刊する予定でおりましたところ、この病気が完治した後も元の体に戻るには相当の期間を要することから、のんびりと構えてはられないと思うようになりました。

そこで、計画を早め、発刊したのが本書です。本来であれば副題は、「林住期を生きる」としたいところを「小さな『林住期』を生きる」としたのはそのためです。また、「林住期」とは職場をリタイアしてからの人生のことで、最も自己を豊かにすることが出来る時期と言われています(五木寛之著「林住期」参照)。内容は、闘病生活の部分が加わったものの、今回も塵芥の寄せ集めとなりました。しかし、私は、塵芥のような人生であったとしても、一つ位はいいところもあるのではないか、いや、社会を構成する大切な「大河の一滴」と考えています。従って、本書のような本がたくさん発刊されることが、生涯学習時代の豊かさの現れと信ずるものであり、類書の発刊を大いに期待するものです。…… 平成28年9月5日



克明に書かれた「闘病生活のメモ」は、阪牧らしく綴られている。読むのが辛くなったが、参考になることも多かった。入院していた長野赤十字病院では、患者に体温や体重を測らせ、日課表に記入させているという。患者の治療への参加であるが、私も名古屋市立大病院に入院したとき、看護師さんに「提案」したことがある。

阪牧は「患者の心構え」として、次のように書いている。— 日々の中で私たちは、事実を前に過度に悲観的にならず、かと言って楽観的にならず、事実を静かに見つめ、あきらめずに生きていく以外にない。「生かされて生きてる限り、生きるのだ」

本書から学ぶことは多い。さらにレポートで紹介していきたい。

(2017年1月8日)